

**平成29年度当初予算編成と
2月定例府議会に向けた**

府政への提言・要望

2016年 12月

民進党大阪府議会議員団

平成 28 年 12 月 9 日

大阪府知事 松井 一郎 様

民進党大阪府議会議員団

代 表 中村 哲之助

府政への提言・要望

～平成 29 年 2 月議会、平成 29 年度当初予算編成に向けて～

初冬の候、貴職におかれては府政推進のため、様々なお取組みをされていることに敬意を表します。

今年度は 4 月に発生した熊本地震を初め、世界の各地で大規模な自然災害が発生し、多くの尊い人命が失われ、貴重な自然と生活関連施設が破壊されました。また都市インフラに関する事件・事故も多発し、改めて安全・安心のための政治が最重要課題であることを実感しました。

さらに今日、世界の各地で大規模な感染症等が発生し、多くの被害を出していること、また、宗教・文化・資源などを巡っての紛争やテロ行為が多発し、深い悲しみと怒りが世界を覆っています。

昨年成立した安全保障関連法に基づく「駆けつけ警護」任務が新たに発令され、このほど南スーダンへの自衛隊派遣が行われました。多くの識者が指摘するように、我が国は今後、決してこれまでと同様に安全ではないと改めて認識し、外交・平和政策のあり方を再構築しなければなりません。また、アメリカのトランプ現象が世界各国の政治・経済にどのような影響を及ぼすのか、注視していくことが必要です。

このような中、本府は全国の都道府県中でも「安全に関するレベル」がワーストに近い状況にあり、さらに、今年度の予算編成では多額の財政調整基金を取り崩すことを余儀なくされるなど、府の財政運営は今後ますます厳しさを増していくと思われまます。このような中で、未来への責任を果たしつつ、財政規律の堅持に努め、安全・安心を実現すること、いざという時のセーフティネットの確立に十分な配慮をしなければなりません。

知事におかれては、私たちがこれまでから求めてきた、①「頑張れば報われる社会」、②「誰にでも出番と居場所のある社会」、③「お互いの違いを理解し、支えあう社会」の実現のため、直面する府政の諸課題と、次代を切り拓く諸政策を積極的に推進されるよう切に望みます。

ついては、表題の件について、以下のとおり提言・要望しますので、可能な限り府政に反映されますようお願いいたします。

府政への提言・要望 (一覽)

1 信頼の府政を築く

- (1) 府政の進め方
- (2) 財政規律
- (3) 庁舎・府有財産の管理について
- (4) 活気ある府庁を
- (5) 公募制度の見直し
- (6) 万博誘致

2 平和と人権・自治を尊重する

- (1) ヘイトスピーチ対策
- (2) 差別撤廃と環境整備
- (3) 市町村との連携

3 子ども・女性に笑顔を

- (1) 乳幼児医療の充実
- (2) 子どもの貧困と虐待などの防止
- (3) 就労支援
- (4) 妊娠と出産へのサポート
- (5) DV対策
- (6) 子育て支援
- (7) 保育の充実

4 福祉・医療の充実

- (1) 地域包括ケアシステム
- (2) 幼老への取組み
- (3) 孤独死・自己放任をゼロに
- (4) 認知症高齢者対策
- (5) 地域貢献と福祉基盤整備
- (6) 3障がい対策
- (7) 福祉現場の安全対策
- (8) 医療従事者の健康管理
- (9) 感染症・がん対策
- (10) 受動喫煙防止対策
- (11) 難病対策
- (12) 医療体制の充実

5 人を育てる教育

- (1) いじめ、不登校児童・生徒への対策
- (2) 夜間中学

- (3) 通学安全

- (4) 府立高校の入試制度と再編
- (5) 教員配置と医療的ケア
- (6) 部活動と教員の多忙化対策
- (7) 私学助成
- (8) 日本語指導の充実
- (9) 奨学金・授業料について

6 暮らしを支える

- (1) 消費者被害対策
- (2) 生活困窮者対策
- (3) 住宅への支援

7 勤労者・中小企業・大阪を元気に

- (1) 働き方改革の推進
- (2) 公契約
- (3) 中小企業振興基本条例
- (4) 商店街の復興
- (5) メンタルヘルス
- (6) ブラック企業とワークルール
- (7) 国家戦略特区等について
- (8) 観光客の増加へ
- (9) 自殺防止・ニート・ひきこもり対策
- (10) トラック協会への補助金復元

8 安全・快適なまちを

- (1) 公共交通
- (2) 空き家対策
- (3) 異常気象と環境対策
- (4) 危機管理
- (5) 警察力の充実
- (6) 自転車の安全対策とモラル
- (7) 都市インフラの老朽化対策
- (8) 水循環基本計画の策定

1 信頼の府政を築く

(1) 府政の進め方

- ① 「競争は私の政治哲学だ」と橋下元知事は言い続け、松井知事も同様の府政運営を続けているが、競争のスタートラインにさえ立てない人達が数多く存在する。競争全てを否定することはないが、競争すること自体が不合理なものも相当ある。違いを認め合い、誰もが共生できる社会づくりを目指すこと。
- ② 特別顧問・特別参与について、府における委嘱人数、行政上の関与などの異常さは、知事の与党会派以外のすべてが指摘してきたところである。他の附属機関委員との一元化などを含めて、抜本的にあり方を見直すこと。

(2) 財政規律

- ① 本府の財政基盤は非常に厳しくなっている。財政規律を厳守することはあらゆる施策に優先するテーマである。さらに、これまでの府政運営では議会との議論が決定的に不足しており、議会との十分な議論なく大規模な投資に踏み切らないこと。
- ② リニア新幹線、関西圏の高速道路のミッシングリンクの解消、北陸新幹線、大阪万博の誘致など、大規模なプロジェクトの推進を掲げているが、費用対効果・次世代への負担・危機管理対策などを十分に検討し、後世に悔いを残さないようにすること。
- ③ 官と民の役割分担を見直し、新時代にふさわしい行財政改革を大胆に進めること。なお公共施設においては、新規建設から更新・維持の時代へ転換しており、ファシリティマネジメントの徹底で、府民の不安と負担を軽減すること。
- ④ 先行的に取り組む広域的な新規事業のあり方を見直すこと。

(3) 庁舎・府有財産の管理について

- ① 咲洲庁舎（旧 WTC）については、安全性・経済

性・利便性・効率性を見地からみて撤退がふさわしいことは明らかである。適切な規模の庁舎を大手前地区に建設し、既存の庁舎を含めて一元的な管理を実現することが望ましい。

- ② 庁舎建設にあたっては、マンション等との一体型複合施設として全国初の試みとなった東京都豊島区新庁舎（昨年5月オープン）の手法も、選択肢の一つとして検討すること。
- ③ 本庁舎、出先機関や各施設の駐車場は有料・無料さまざまであるが、一定の利用料金を徴収することを原則とし、どうすれば公平・妥当なシステムになるかを検討すること。
- ④ 府有財産の適正管理のため、府所有の未登記建物の表題登記を積極的に推進すること。

(4) 活気ある府庁を

- ① 府庁を活気あるものとするためには、そこで働く職員が活き活きと働ける環境が大切であり、職員がその能力を発揮でき、責任感を持てる職場づくりを進めなければならない。非正規労働者が激増し、格差の拡大・固定化が進む中、公務員バッシングがますます強まっている。府庁に活気をよみがえらせ、職員が躍動する環境づくりへ知事が先頭に立つこと。
- ② 大阪府人事委員会が今年度の勧告（2016年10月17日）の「意見」で「職員の理解と信頼が得られる制度とは言い得ない」、「制度設計の見直しが検討されるべき」と示しているように、現行の知事部局における人事評価制度を抜本的に見直すとともに、職員基本条例の廃止も視野に入れた検討をすること。
- ③ 高質な行政サービス提供のためには、有為な人材の確保が重要である。しかし、官民を問わず人材確保競争が激化し、本府の職員採用試験の競争倍率は低下傾向にある。適切な勤務条件を整備し、国、他の地方公共団体、民間企業との比較で、魅力ある職場であることを効果的に発信するなど、人材確保に向けた取り組みを強化すること。
- ④ 世代交代によって増えつつある若手職員へのノウ

ハウ継承の観点から、再任用制度を効果的に運用する必要がある。職域の拡大や適切な勤務条件を整備することにより、高齢期職員が引き続き大阪府において、その能力と経験を発揮したいと考える魅力ある職場づくりを検討すること。

(5) 公募制度の見直し

民間人材の活用と職場活性化のために導入した公募制度は幾分の成果があるとしても、問題点の方がはるかに大きいことが既に明らかとなっている。利点だけを強調して、問題点に目をつむったまま制度継続することは不適切であり、きちんと課題に向き合って、根本的な見直しを実施すること。

(6) 万博誘致

2025年大阪万博開催に向けた取り組みが進められているが、開催に要する適正な費用負担と、国・地方・経済界のそれぞれの役割の明確化を確立した上で推進すること。

2 平和と人権・自治を尊重する

(1) ヘイトスピーチ対策

① いわゆるヘイトスピーチは、諸外国に対する日本社会のイメージを損なうものであり、若者から相当な高齢者までもが集会に加わっている現状からすれば、もはやこれを放置することは許されない。表現の自由で済まされるものではなく、むしろヘイトクライム(犯罪)と呼ぶべきものであり、行政が毅然とした対策を進めるべきである。

② ヘイトスピーチに加えて、ネット上での悪質な差別表現などの新たな差別問題が深刻化している。人権啓発の充実とともに悪質な事案を規制する条例制定に取り組むこと。

(2) 差別撤廃と環境整備

① 障がい者を理由とする差別をなくすための取り組みは、障がい者一人ひとりの生活を暮らしやすいものとするだけでなく、府民全体で障がい者の問題を考えるよい機会となり、障がいのある人もない人も、ともに地域社会の一員として暮らしていけるのが当たり前という府民文化を創造することにつながる。

大阪府では、障害者差別解消法の施行と同時に障がい者差別解消条例を施行したが、条例の附則も踏まえ、府や市町村に寄せられた相談事例について、障がい者団体等関係者の参画のもと、分析・評価を行い、差別解消の取り組みの検証を行うこと。

② あらゆる差別の撤廃に向けた取り組みを強化するとともに、2016年12月に国会で成立した「部落差別解消法」の目的・基本理念等をふまえ、部落差別撤廃のために相談体制や啓発及び教育の充実、部落差別の実態に係る調査を推進すること。

また、LGBT等の問題についても積極的に取り組み、公正採用選考人権啓発推進員制度等を活用して差別撤廃・人権確立に向けた企業等への取り組みを強化すること。

さらに国際都市大阪として、人権・環境等について定めたガイドランスである「ISO 26000」(2010年11月発行)の具体化に積極的に取り組むこと。

③ 府民が身近なところで人権について学べる機会を増やすための環境整備に努めること。

(3) 市町村との連携

① これまでの取り組みにより、大阪市との連携は進んだように見えるが、言うまでもなく、府内の市町村は大阪市だけではない。大阪市との連携は必要であるが、むしろ、財政基盤の弱い他の市町村との連携・支援を充実させていくことが必要である。

② 住民により身近な市町村で事務が行われることは望ましいが、事務の取扱いに相応しい財源が担保されていることが事務移譲の前提条件である。「権限」と「財源」はセットで考えるべきものであり、既に移管済みの事務についても、真の分権・自治に相応しいものと

なっているかを点検すること。

③ 大阪市は現在、総合区・特別区についての説明会を開催しているが、これらはもともと同質のものではなく、住民に誤解を生じさせる恐れがある。住民投票で否決されたいわゆる大阪都構想推進のための説明会とならないよう、副首都推進本部としての適切な対応を行うこと。

3 子ども・女性に笑顔を

(1) 乳幼児医療の充実

社会全体で子どもを育てていく観点からすれば、医療費助成制度に所得制限を設けるべきではない。また、乳幼児に限定せず、義務教育終了までは家庭の医療費負担をゼロにすることが、子どもを持つことを望む家庭へのあるべき支援である。

(2) 子どもの貧困と虐待などの防止

① 昨年施行された「子どもの貧困対策法」において、貧困対策は国と自治体の責務とされた。同法に基づき6月から大阪府内で「子どもの生活に関する実態調査」が行われたが、精緻な分析をもとに、「貧困は自己責任」という市場原理から脱却し、「子どもの育ちは社会全体で支える」という理念に沿った総合的政策を実施すること。

② いじめ・虐待で落命する子どもが後を絶たない。公権力の介入により積極的に解決すべき問題であって、継続的に有効な手立てを講じること。

(3) 就労支援

すべての国民は勤労の権利を有しており、就職困難層がその権利を行使するにあたり要する特別の配慮は、行政において提供すべきものである。

同時に、勤労は国民の義務でもあるが、自助努力に委ねてしまうのではなく、労働条件の整備など必要な支援を行政において実施すべきであり、とりわけ、母

子家庭の母への就労支援策は府が率先して実施すること。

(4) 妊娠と出産へのサポート

社会情勢が少子化・核家族化へと変容する中で、地域のつながりが希薄となり、育児や出産で身近な協力を得にくい世の中となった。

そこで、妊娠、出産、子育ての間を埋める切れ目のない体制作り、シームレスなサポートが必要であり、特に妊婦の相談・健診、育児などに十分な支援策を講じること。

(5) DV対策

外国出身の女性がDV被害にあう事例が多く、その対策はとりわけ重要である。日本語が分からないために、事案がより深刻化する傾向にあるため、母国語で対応できる窓口を拡充すること。

(6) 子育て支援

各市町村の事業計画とその進捗状況を府において検証し、実効性ある施策が実施されるよう、市町村への支援を充実すること。

さらに、地方版子ども子育て会議の開催状況が芳しくない市町村に対して、府において必要な支援を行うこと。

(7) 保育の充実

休日、夜間、病児・病後児・短期入所などの多様な保育の充実に取り組む自治体や保育園・NPO 団体等を支援すること。

また、昨今の保育を取巻く環境は「待機児の解消」、いわゆる量の確保が主流となり、保育環境の低下が心配される。保育には様々な状況があり、例えば、0歳児では熱を出すなどで保育所を休む日数は年間平均で31.2日となっており、途方に暮れる保護者は少なくない。病児保育という形態でも、訪問型などが強く求められている。保育の質アップと保育環境エリア拡充へ

府は先頭に立って取り組むこと。

4 福祉・医療の充実

府こども総合計画・第4次障がい者計画・高齢者計画2015・第3期大阪府地域福祉支援計画を確実に推進し、必要な人・必要なとき・必要なサービスが確保される福祉社会の構築、さらに、住み慣れた地域で安心して医療が受けられる体制の構築へ、下記の課題をしっかりと対応すること。

また、福祉医療費助成制度の全面的な見直しに入っているが、「持続可能な制度の維持」という美名のもと、総枠抑制のための見直しとなってはならない。また見直しに伴う激変緩和措置が、事実上効果のない見直しとならないよう、関係者の意見を聴取しつつ、十分な検討を行い、セーフティネットとしての役割を十分に果たすこと。

(1) 地域包括ケアシステム

現代において福祉は、雇用と経済発展を生む有望な分野になっている。利用者の人権を重視した良質なサービスの提供を確保するとともに、サービス提供者の経営基盤の安定化を図るために、様々な団体の参画も得ながら、安全・安心の地域包括ケアシステム作りに取り組むこと。

(2) 幼老への取り組み

高齢者施設と保育園等を併設し、高齢者と幼児が交流する取り組みが富山県を初め全国各地で進んでいるが、府内においてはまだ具体的事例を見る機会に恵まれない。

府でも、事例の調査・研究を通じて効果を把握し、積極的な導入を検討すべきである。

(3) 孤独死・自己放任をゼロに

① 日本では古来より、高齢者はムラ全体で守るべき

存在であり、孤独死というようなことは起こりえなかった。それが現代においては、近隣住民による見守りが期待できない以上、行政がこの問題へ積極的に関与すべきであり、高齢者を一人にしないシステムを構築し、孤独死ゼロを明確な目標に明示して取り組みを推進すること。

② セルフネグレクト（自己放任）の方は全国で1万人を超えると指摘されている。死亡する事例も報告されており、市町村とともにこれを根絶するための有効な方策を進めること。

(4) 認知症高齢者対策

① 全国で不明者が1万人を超えることが報告されており、所在確認のための情報共有やGPS、IOT（Internet of Things）などの取り組みを進めること。

② 市町村長からの成年後見の申立てについて、地域ごとの差が大きすぎる。市町村の抱える課題を調査し、十分なノウハウを持たない市町村へのサポートなど、地域による格差を平準化させる取り組みが必要である。

(5) 地域貢献と福祉基盤整備

① 地域貢献を望む社会福祉法人、非営利組織等が活動する環境向上の絶え間ない整備に努めること。

② 福祉基盤の整備において最も重要なことは人材の確保である。その確保の妨げとなっている環境課題を改善し、人材の定着率を向上させる取り組みを進めること。

③ 民生委員・児童委員の担い手不足が深刻化していることから、見える化プロジェクトとして今年度実施した「大学生を対象としたインターンシップ・プログラム」の総括に基づき、参加自治体・大学を増やし、民生委員・児童委員活動の担い手の確保と活動しやすい環境づくりを一層進めること。

(6) 3障がい対策

身体・知的の障がいに比べて、精神障がいは施策展開が遅れている。3障がいへの施策を平準化すべく、

市町村との取組みを強化すること。

(7) 福祉現場の安全対策

① 福祉施設で相対的に弱い立場に置かれる利用者を守るための取組みを推進し、さらに、悪質な施設などは直ちにそれを公表し、社会的な制裁を促すこと。

② 介護施設のBCP策定がほとんど浸透していないとの指摘がある。府内のあらゆる介護施設のBCP策定について、現状を把握するとともに、必要な支援・指導を実施すること。

③ グループホーム等へのスプリンクラー設置などが急がれるが、様々な理由によって設置困難な施設については、関係機関と連携し柔軟に安全対策を講じること。また、府営住宅を利用したグループホームが568ヶ所で開催されているが、設置が必置とされている施設には設置を急ぐこと。

(8) 医療従事者の健康管理

医療従事者の健康管理は不可欠であるのに、定期検診を実施していない医療機関が余りにも多い。内科・小児科・歯科などで受診する患者は健常者とは異なり、些細なことで感染し、罹患することがある。これまでからこれを指摘してきたが、大幅な改善が図られていない。定期検診の報告がなされない医療機関は実名の公表も含めた対策を講じ、府民の健康管理に努めること。

(9) 感染症・がん対策

① インフルエンザをはじめMERS、SARSなど感染症に関するニュースを耳にする機会が近年になって増えている。その影響の大きさ・深刻さからすれば、医療部門だけの問題と考えるのではなく、府内市町村・企業などと一体になって対策に取り組むべきである。

② 大阪府の第2期がん対策推進計画は2017年度までとなっている。がん対策は議会でもたびたび取上げられているが、検診はまだ不十分である。がん対

策日本一をめざし、検診率の向上等へ力を入れること。

(10) 受動喫煙防止対策

受動喫煙防止対策を効果的なものとするため、保健所が現地指導するなど、指導的な役割を果たすこと。

(11) 難病対策

① 難病法が昨年1月に施行され、7月には新たに196疾患が難病に追加され、計306疾病となった。これによって、府内の医療費助成の受給対象者は大幅に増加した。医療費助成制度に係る国の費用負担(1/2)は法定化されたが、難病患者の療養生活の支援に関する事業は国の予算の範囲内での実施となるため、必要額が全額カバーできていない。今後ますます府の負担が増額すると思われるため、国への要請とともに府も必要な対策を講じること。

② 多くの難病患者と団体の悲願となっている「難病センターの建設」を求める請願が2000年9月に採択されており、実現に向けた支援を行うこと。

(12) 医療体制の充実

① 地域医療構想が策定されたが、病床数の単純な数値のみで拙速な対応を進めることのないようにすること。

② 大阪の二次救急医療体制が崩壊の危機にあると医療関係者から強い指摘が出されている。弱体化した原因の究明と再構築に努めること。

③ 女性医師の就業環境の改善と整備を図るため、府として復職研修や相談事業を積極的に進めること。

④ 近年の8020運動に見られるように、また夜間の歯科救急医療が取組まれるなど、口腔(特に歯科)の健康対策が重要になっている。

しかし、本府ではこれまで医科への対策に比べると歯科への対応(歯科医師の積極的配置や専門部署を設置するなどの措置)が充分とは言えない。府民の「歯」の状況を的確に把握し、新たな施策展開のためにも、速やかに歯科専門部署(グループ)を設置するととも

に、府内の保健所へも可能な限り歯科医の配置に努めること。

また、歯科救急医療への府費投入を拡充すること。

5 人を育てる教育

(1) いじめ、不登校児童・生徒への対策

中学校での子どもによる暴力事案は、府教委によるこの間の取り組みで減少している。しかし、一方で小学校での暴力事案が増加している。中学校での取り組みに学び、小学校での取り組みに活かすこと。

フリースクール等学校以外の場に通う児童・生徒も含めて、不登校児童・生徒の学習活動や心身の状況等の継続的な把握等、必要な措置を講じること。

(2) 夜間中学

夜間中学へ通う方々は、学びへの意欲という面で、最も高次の思いを抱いて勉学に励んでいるといっているに過ぎない。「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」の理念に基づき、これらの方々を支える取組みに公費負担を増やすこと。

(3) 通学安全

通学安全にかかるソフト・ハード両面の整備について、各市町村の自助努力だけに任せるのではなく、必要な支援を府において追加的に実施すべきである。

(4) 府立高校の入試制度と再編

① 平成 28 年度府立高校入学者選抜は、制度を大きく刷新して実施された。今後も受験生が安心して入試に取り組むことができるよう、入学者選抜を安定した制度として運用するとともに、市町村教育委員会などの意見も踏まえつつ、制度検証を続けること。

② 再編は単純に府の都合で策定したルールのみで決定できるものではなく、これまでの歴史や地域での役

割などを十分に考慮することが必要だ。また、小出しでの計画作成には場当たりの印象が拭えず、始めに全体計画を明らかにすること。

(5) 教員配置と医療的ケア

① 今年 5 月 18 日に財政制度等審議会が示した「経済・財政再生計画」の着実な実施に向けた建議では、教職員の加配定数については、適正性を再検証した上で分類し、真に必要なものものの基礎定数化、PDCA サイクルを徹底した上での加配定数措置とすべきといったことが示された。現在においても教員数の絶対的な不足と深刻な多忙さが指摘されている。教育の基本は「人材」、この当たり前のことを実践するために、府が単独で加配を行うこと。

② 人工呼吸器を使用する子どもが府立支援学校に入学する際、原則として保護者の一日中の付き添いを求める現行の取り扱いを改め、必要に応じて看護師配置を充実すること。

③ 医療的ケアの技能習得を、支援学校の全教員に義務付ける先進的な自治体が現われ始めた。府においても、看護師等の指導のもと、関係教員が認定特定行為業務従事者の認定を受けられるよう、必要な取組みを進めること。

(6) 部活動と教員の多忙化対策

① 多忙を極める教員の子どもの向き合う時間や指導の質の確保につながる動きとして、部活動指導員（仮称）が今年度中に省令上明確化される予定である。府内の教育現場をみれば、一刻も早く実現を求められる内容であるため、府においても権限・予算などの検討を早急に始めること。

② 「働き方改革」や教職員の健康管理の観点から、長時間勤務の一層の縮減を図る必要があるとして、向井教育長が「全校一斉休日」、「ノークラブデー」の考えを記者会見で示した。府立学校だけではなく各市町村立学校においてもその趣旨が実効あるものとなるよう、指導・助言を徹底すること。

組みを推進すること

(7) 私学助成

① これまでから経常費助成の100%復元、耐震化率の100%達成を繰り返し提言してきた。

さらに、現行の58万円のキャップ制は多くの問題を抱え、私学関係者から再考要請も強く打ち出されており、速やかに見直しに着手すべきである。

② 6年にも及ぶ朝鮮学校への運営補助金ストップが学校経営を行き詰らせた結果、社会保険料の掛け金滞納にまで至っていると報道されている。このような状況を放置することは許されず、補助金復活を含めて現実的な対応方を検討すること。

(8) 日本語指導の充実

府内の小中学校・義務教育学校・高校には、日本語を十分に話せない子ども達が多数通学し、混乱も生じている。これらの子ども達が安心・円滑に学校生活を送ることを可能にするため、従来の取組みをさらに拡充するとともに、十分な予算を措置すること。

(9) 奨学金・授業料について

① 国際人権規約が謳う中等・高等教育への漸進的無償化の要請からすれば、貸与型奨学金は縮小していくべきであり、速やかに給付型への転換を図っていくこと。

② 家庭の経済状況によって大学進学を断念することのないよう、大阪府立大学における授業料減免制度を改善すること。

6 暮らしを支える

(1) 消費者被害対策

Facebook、LINE等のSNSの絡んだ消費者トラブルが急増している。とりわけ、高齢者らを狙った特殊詐欺事件が大阪で多発し、被害額が大変な高額となる事案も発生している。予防と取締りに向けて一層の取

(2) 生活困窮者対策

① 平成27年4月から生活困窮者自立支援制度が始まった。これまでは事実上、生活保護給付が唯一のセーフティネットであったが、同制度は生活困窮者に現実的な自立への道筋を提示するものである。

しかし現状は、自治体によって取組みの様子は様々で、その内、半数は相談窓口だけを設置しているといった有様である。生活再建につなぐ有効な手立てが講じられるよう努めなければならない。

② 制度における就労訓練者について、民間事業所への受け入れが円滑に進むよう、府は新規事業所開拓や事業所支援（補助金・優先発注など）を実施し、生活困窮者の仕事づくりに手厚く取り組むこと。

(3) 住宅への支援

① 簡易宿泊所の火災事故は深刻であり、宿泊者を守る消防設備等の整備を急がなければならない。そのための特別融資制度を検討すること。

② 孤独死や事故などへの懸念が障壁となって、単身高齢者の住宅確保が難しくなっている。貸し渋りなどで自立した生活を送れない高齢者や障がい者のためには、家主と行政の連携による「文京すまいるプロジェクト」（東京都文京区役所）のような先進的なシステムが必要であり、府においても同様の制度導入を検討すること。

7 勤労者・中小企業・大阪を元気に

(1) 働き方改革の推進

公労使（府もメンバー）による働き方改革推進に向けた推進会議が設置され、14項目を掲げた共同宣言を出したが、数値目標を含め、実効性のあるものとするための府の取組みを着実に進めること。

(2) 公契約

昨今、コストダウンばかりが叫ばれる公共発注であるが、府経済への浮揚効果も同時に充足することが必要であり、そのためにも、地元労働者の適正な賃金確保につながるべく公契約のルールづくりに取り組むこと。

とりわけ、消費増税後、価格転嫁をさせない企業があり、下請け2法やガイドラインを周知徹底し、公正取引に向けて監督行政庁と連携を図り、適切な行政指導を行うこと。

(3) 中小企業振興基本条例

府の中小企業振興基本条例が制定されて5年が経過するも、目的である中小企業振興はまだまだ道半ば。条例の趣旨にのっとり、積極的な取組みと効果的な施策展開を実践すること。

なお、社会保険料の事業者負担や雇用保険など、労働者を守る最低限のセーフティネットを負担しない事業者は、公共発注から除外するよう措置すること。

(4) 商店街の復興

これまで街の中心として、さらに地域の暮らしに大きな役割を果たしてきた商店街が、車社会の進展と大型店舗の進出などによって、シャッター通りと言われるようになってきている。少子高齢社会の中で、商品販売のみにとどまらず、福祉的観点からもその役割をしっかりと見直し、商店街の活性化のため、府が積極的にサポートすること。

(5) メンタルヘルス

中小零細企業において、従業員を対象としたメンタルケアへの取組みには遅れがある。このことも含め、労働者の待遇改善につながる公共サポートと同時に、人材確保につながる雇用者へのサポート体制を強化することが必要であり、府の単費投入も含めて検討すること。とりわけ、過重労働・過労死対策に重点的な取組みを行うこと。

(6) ブラック企業とワークルール

① 労働者の人権と労働関係法令を無視し、利益を優先する企業には、厳正に対処すべき。また、このような企業が府の発注する事務事業の受注者となることは許されない。

② ブラックバイトなどの横行は、働く側の「労働と関係法令」に関する十分な知識のないこともその原因の一つと指摘されており、ワークルールを学ぶ機会を保障すること。

(7) 国家戦略特区等について

① 統合型リゾート（IR）問題が国会審議で大きく動き出した。刑法における賭博罪・依存症・マネーロンダリング・環境問題など様々な課題があり、また国民世論でも「カジノ反対」の声が多数を占めていることも示されており、大阪へのカジノ誘致は断念すべきである。

② 外国人家事支援人材の受入が可能となり、具体的内容が規定されたが、人材の権利が侵害されることのないよう、状況把握に努めること。

③ 大阪のホテル不足を補うため、国家戦略特別区域外国人滞在施設経営事業が本年4月から始まったが、利用者・事業者への配慮ばかりが対象課題になっている。しかし、それ以上に、「住民の平安」を守り、問題点が生じた際にどのように対処できるのかを検討すべきである。併せて、違法民泊に対しては厳しい姿勢で臨むこと。

(8) 観光客の増加へ

① 大阪へのインバウンドの急増に伴い、多言語対応の強化やWi-Fiの整備拡充など、喫緊の課題となっている観光客の受入環境整備の充実・強化を図ること。

② 府内に最低1ヶ所、多言語での相談・診療ができる人材を配置し、外国人が安心して受診できるインターナショナル病院を設置すること。

(9) 自殺防止・ニート・ひきこもり対策

① 「平成 27 年版 自殺対策白書」によれば、2014 年の自殺者数は 25,427 人と 5 年連続で前年比減、ピーク時から 26%もの減少ではあるが、

- ・年齢階級別では 20 代で 14%減、30 代で 19%減にとどまる

- ・自殺者の実行時間帯は深夜 0 時に集中

との特徴がみられ、若年層へのアプローチや深夜時間帯での相談窓口の充実をはじめとした見直しを行うこと。

② ニート・ひきこもりの若者に対して、生活の基礎から指導し、自立させる支援プログラムを充実させること。府は一昨年度で「子ども・若者自立サポート事業」、「中間的就労の場作り事業」の 2 事業を打ち切り、ひきこもり対策が弱体化したと言わざるをえない。

国が自治体と共同で設けた「地域若者サポートステーション (=サポステ)」事業がより活動を充実できるよう、施策の拡充に努めること。

(10) トラック協会への補助金復元

大阪府トラック協会への運輸事業振興助成補助金を府が独自に減額していることは極めて不適切な判断である。他の都道府県と同様に支出することが好ましく、速やかに復元すること。

8 安全・快適なまちを

(1) 公共交通

① 府は公共交通の維持・活性化に向け、沿線自治体と一体となった取り組みが必要である。また、密接な利害を有する地域住民や運輸産業関係者などが一体となって「公共交通網の確立」を急ぐこと。利用者にとって利便性の高い交通網は各市町村の活性化にも役立つものである。また、府は各地域で進められる協議会などの組織づくりをサポートすること。

② 連続立体交差事業（枚方市域・大阪市域等）の着

実な推進が可能となるよう、予算枠の確保対策などを積極的に行うこと。

③ 鉄道駅における転落防止のための柵やロープ等の設置対策とともに、高速道路料金を利用者の立場に立った体系に改めていくこと。

④ 新名神高速道路とともに関係市から切望されている淀川渡架橋の早期建設と、これに伴うアクセス道路のあり方を地元市とともに着実に整備し、地域住民の問題提起に真摯な対応を行うこと。

(2) 空き家対策

① 空き家の存在は、火災の発生源となるに留まらず、延焼を引き起こす恐れもある。さらに、災害発生時に避難・救助・救援活動に支障を及ぼすことで被害を拡大させる恐れもあり、解決すべき重要課題である。空き家近隣の住宅・住民に危険を及ぼさないよう対策を強化すること。

② 住宅弱者の居住環境の改善や、地域活動の拠点作りにおいて、現存する空き家は活用の余地がある。地域の方々からアイデアと協力を得て、現実的な対応策を検討すること。

③ 府営住宅の入居者死亡等によって家財道具等が残り、新たな入居に支障が出ている住居が相当存在する。これの早期解決に向けて有効な方策を打ち出すとともに、民間住宅での同様のケースへのサポートも行っていくこと。

(3) 異常気象と環境対策

① 近年になって爆発的に急増し、また大規模化している局地的な風水害に対応できるよう、ソフト・ハード両面において府内市町村との連携、支援を充実すること。

② 森林の管理は、単なる自然保護にとどまらず、土砂災害防止の観点からも重要な効能を有する。さらに、土石流にともなう流木対策や斜面における倒木対策を強化するなどして、自然災害への対策に万全を期すこと。

③ 森林環境税の導入に伴う具体的な事業展開について、費用対効果を府民がしっかりと把握できるようその見える化に取り組むこと。

(4) 危機管理

① 災害弱者の災害時の移動の安全を徹底すること。
② 災害時に備え、平時から「誰でも分かる優しい表現」で正しい情報を伝えられる取組みを進めること。

(5) 警察力の充実

① 犯罪発生時の万全な対処は、同時に、将来の抑止力にもつながるものである。警察の組織体制は、どれほどの水準であろうと十分ということはなく、警察官のより一層の増員に努めること。
② 警察官の職務は、常に危険と隣り合わせのものであり、財政上の理由で装備資機材を不十分なまま放置することなど、絶対にあってはならない。必要な装備資機材は漏れなく充実させ、警察官が安心して職務を遂行できる環境づくりに努めること。
③ 防犯カメラの存在は、犯罪の事前予防、抑止力を高めることにつながるものであり、今後も積極的な増設に努めること。
④ 危険な交差点などをつぶさに点検・把握し、重点的な信号機の設置を進めること。また、耐用年数を過ぎ老朽化した信号制御機が多数存在することから、昨年3月に警察庁が中長期的な整備計画を策定し、都道府県と連携して整備に取り組むよう全国の警察本部へ指示したところであり、計画的な改善に取り組むこと。
⑤ 不祥事の多発を食い止め、警察への信頼をより確かなものとされるよう取り組むこと。

(6) 自転車の安全対策とモラル

① 自転車保険がしっかりと定着するよう、関係機関との連携を進めること。
② 自転車の走行レーンを整備せず、歩道の走行を認めてきたことは、いわば行政の不作为であったといわざるをえない。このような状況を放置することなく、

府内道路における自転車レーンの整備を計画的に推進すること。

(7) 都市インフラの老朽化対策

① 道路、橋梁、上下水道管などの様々な都市インフラについて、高度経済成長期に建造されたものが数多く存在し、今後、大規模な修繕や施設更新が一時期に集中する恐れのあることを、わが会派はかねてより指摘してきた。知事はこれを受け、計画的な修繕、更新を進めるとし、一定枠の予算を確保しているが、現在の取組みスピードで老朽化対策は万全といえるのか、対象物をすべて具体的に把握した上で、それぞれの達成年度を明確に示すべきである。
② 持続的な下水道機能の確保に向けた下水道法の改正を受けて、市町村へのサポートの充実に努めるとともに、府の全施設・設備の点検を改めて行うこと。
③ 道路整備については、低騒音で保水性の高い舗装を行っていくこと。

(8) 水循環基本計画の策定

一昨年施行された水循環基本法に基づき、昨年7月に政府は「水循環基本計画」を策定した。府においても、消費者・労働者の代表など多様な府民の声を反映した行動計画を策定すること。